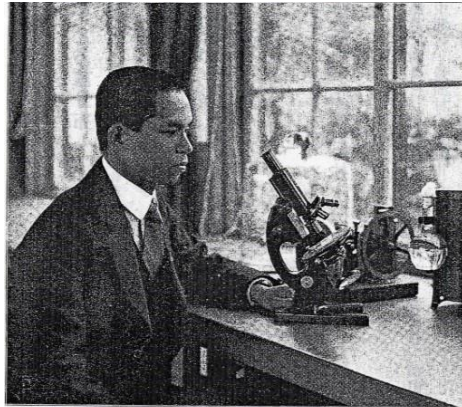


佐藤清明資料保存会会報

No. 8

岡山文庫「博物学者 佐藤清明の世界 附現行全国妖怪辞典」刊行記念



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会
里庄町立図書館

2022.3.20.

会報第8号 もくじ

1. あいさつ	佐藤清明資料保存会副会長	杉本秀樹	1
2. 岡山文庫『博物学者佐藤清明の世界』発刊にあたって	副会長	生宗脩一	2
『天然記念物調査録』との出会い	事務局	小野礼子	7
3. 書誌紹介『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』	顧問	木下 浩	8
4. 佐藤清明 人物相関図（民俗学・植物学を中心に）	顧問	木下 浩	10
5. 『佐藤清明資料』を読む ①			
天然記念物調査録 英田編（ソノ一）を読んで	顧問	稲田多佳子	11
6. 岡山文庫『博物学者 佐藤清明の世界』出版記念コーナー			17
7. 里庄のせいめいさん展			18
8. 佐藤清明ゆかりの菊桜 育成記録	理事	佐藤健治	19
9. 編集後記			21

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

あ い さ つ

佐藤清明資料保存会副会長
里庄町教育委員会教育長 杉本 秀樹

令和3年10月26日、岡山文庫より『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』の初版が発行されました。編著者は、佐藤清明資料保存会です。

岡山文庫は、昭和39年に第1号が刊行されました。以来、数多くの皆様のご尽力により、岡山県の自然と文化のあらゆる分野における内容について、刊行が進めてこられました。各方面から、高く評価されている刊行物であります。このような岡山文庫の323号として、佐藤清明資料保存会会員22名が分担執筆した、佐藤清明先生の偉業等が仲間入りしました。

今、振り返ってみますと、刊行までの道のりは決して平坦なものではなかったと思います。10月刊行のお話をもたらされたのは、令和3年5月に顧問の木下浩氏からだど記憶しています。刊行が10月ですから、時間があるように思えますが、現実的には短時間の中でやるべきことが想像以上に多く、本当に間に合うのかなという思いもありました。調査・検証・確認・執筆・校正・再確認などなど、膨大な作業が必要となるからです。

しかし、私の不安はあっという間に払拭されました。コロナ渦の中で、ズーム会議なども頻繁に行われ、スケジュール確認、執筆の分担、資料提供、編集、校正など、実にスピーディーに作業を進めてくださいました。並大抵のご苦勞ではなかったと、心から頭の下がる思いです。会員皆様方のご協力やご尽力に、改めてお礼申し上げますとともに、心から感謝申し上げます。

皆様のお力添えのおかげで、岡山文庫323号は会員一同、そして里庄町にとりましても大きな誇りとなる刊行物となりました。佐藤清明資料保存会として、これからもさらに調査や研究を進めて行くにつれ、困難なことにも出会うことと思います。会員の皆様や関係の皆様方と共に、知恵を出し合い、心を寄せ合いながら、すばらしい先人の業績を顕彰し、後世にきちんと伝えていくことが大切であると考えています。会員の皆様、ご支援やご指導をいただいております関係の皆様、そして町民の皆様方に、今後とも温かいご支援やご協力を、心よりお願い申し上げます。

発刊にあたって

佐藤清明資料保存会副会長 生宗脩一

I はじめに

「まなざし」「つなぐ」「地域」

上記の言葉は、2021年11月25日、里庄町フロイデにおいて、「つなぐ 岡山近代地域史—孤児院の子供を見つめて—」と題して、岡山県立記録資料館の山本秀夫氏の出張講演におけるレジメの「はじめに」で、キーワードとして使われた言葉である。

この中で「つなぐ」は人をつなぐ、事をつなぐ、地域をつなぐ意味があると。

時も良く、『博物学者 佐藤清明の世界 附録 「現行全国妖怪辞典」』出版が2021年10月26日に初版発行された直後のことで、書店の店頭に並び始めた時である。この出張講演の聴衆は、里庄町を中心に笠岡市や周辺地域から70名の参加者があった。

講師の山本氏が、この本『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』を岡山駅構内書店で購入して読んだことを演壇の上で高々と掲げて見せ、関心ある個所を紹介されたのである。さらに、高島の植生調査などをあげて瀬戸内海調査内容まで披露され、私は感動したものだ。

この講演で、里庄町と岡山県記録資料館を「つなぐ」ことは勿論、講師と会場の聴衆を「つなぐ」こと、さらには、里庄町立図書館と岡山県立記録資料館とを「つなぐ」ことまでもできたのだ。

というのは、講演後、この本を紹介してくださった事を里庄町立図書館に伝えると、図書館から岡山県立記録資料館へ送本してくださり、その後、資料館からお礼の返信を頂くことができたからである。返信の内容から、資料館の方々が佐藤清明について理解してくださっていることがよく伝わってきた。

さて、個人的に今ふり返ると、2012年3月7日に山陽新聞に「若手研究者と親密な交流」—牧野富太郎の書簡解説—（里庄で16通発見、伝わる熱心さ）として佐藤清明は博物学者でなく「岡山県文化財保護審議会委員を務めた」と記されている。

私は里庄の偉人がここにあると皆さんにお伝えをしても、当時ほどなたにも響かなかったのである。自分の非力とともに「まなざし」の大切なことを感じている。

図書館の小野主査の提案がきっかけで清明研究が始まり、ついに2018年「佐藤清明資料保存会」が発足、会の目的、組織と事業など確立された。活動内容も図書館を事務局として順次広がり、ついに佐藤清明についてはじめての書籍が発刊出来たのである。

II 発刊までの編集経過の概略

書籍が発刊できたことへの感謝を伝える意味で、その経過について報告する。

令和3年度の佐藤清明資料保存会事業計画では当初発刊は計画に無かった。ところが岡山文庫の発刊計画の都合で、急遽10月中に発刊の話が顧問の木下浩氏（以下木下氏

とする)にもたらされた。木下氏は岡山文庫より数冊執筆発行している経緯もあり、急遽短時間でも発行の運びが出来るとの思惑があったものと考えられる。

令和3年5月15日(土)第35回清明研究会に於いては、発刊アウトラインが発表されたが審議時間も取れなくて、結局その夜からズーム会議となった。

コロナ禍のため理事会も総会も紙上議決で進めたのである。

ズーム会議の持ち方は伊藤智行理事(以下伊藤氏)のホストにより、発刊の総責任者木下氏の、スケジュール確認から入った。清明研究会全員はズーム会議に参加できないので、会議の議事録をその場で伊藤氏がタイピングし、結果を会員にメールで知らせ、ネットでも意見を聞くスタイルをとった。伊藤氏はパソコン技能に長じており、ソフトを駆使して、清明資料の写真や記録資料を検索し、会議中メンバーに即時提供し、作業能率を上げることができた。

もちろん木下氏は発行企画から編集の要領を的確に指示する総指揮官として、皆さんを激励し、きちんと細心をもって全文を確認し、編集と校正にあたり刊行まで貫かれた。

図書館が事務局であり、文章編集にも手馴れている事や資料まとめや校正にフットワーク良く積極的に取り組まれたことを忘れてはならない。

ズーム会議は毎週土曜日の20時より約1時間の予定で進めた。メーリングリストの確認も伊藤氏に負うところが大きかった。

10月刊行で全体のページ数は変更不可、字数の厳守について木下氏より執筆者に強く伝えた。

これも木下氏の豊富な刊行経験によるところが多く、皆さんはそれに応えていった。

執筆者は清明研究会のメンバーが得意な分野を予め木下氏より割り当てられ、目次構成が組まれている。平素の清明資料保存会活動を通して、木下氏が評価していたためであろう。

最終の編集会議もズーム会議で行い、木下氏が原稿全体を確認し校正をした。コロナ感染症の予防策のテレワークそのもので、却って細かく検討できた。

伊藤氏は会議中に議事録を作成、翌日には関係者にメールするスピーディさがあった。以上の経過で岡山文庫に原稿データそのままを渡せる基本スタイルが確立できた。

5月の発刊構想発表以来10月刊行という短期間に会員がそれぞれ執筆できたことは、清明研究会、清明を読む会、展示会、図書館ホームページの「清明特設サイト」や「会報」、それに貴重な清明資料整理とデータ化が寄与している事は言うまでもない。

特に論文・寄稿文の執筆経験が多い顧問の方々の内容は手慣れたものである。校正段階でも多くの助言を頂いたことも特筆すべき事項である。

佐藤清明資料保存会の皆さんが執筆でき、ワンチームによる岡山文庫本は少ないとも言われ、会員一同の誇りでもある。

Ⅲ 編集付記

1. 編集、校正を通して高橋寿美江氏よりメールにて参考情報を提供されたので、原文のママを付記する。冊子に目を通す時や今後の参考になれば幸甚である。

① 昭和6年、佐藤先生がラジオ番組でカブトガニの話をする前に、金光中学の校長が佐藤先生と小太郎を引き合わせた。当時、小太郎は満州に出張していて、すぐに会えませんでした。小太郎が短期間で満州でのビジネスに見切りをつけるきっかけの1つだったと思います。

② 佐藤先生が頻繁に大阪の高橋家に来訪したのは、昭和10年～18年の第1期と、昭和25年～54年の第2期に分けられます。中断期の昭和18年～25年には高橋家は笠岡に疎開しており、二人は岡山博物同好会で一緒に活動していました。

③ 第1期（昭和10年～18年）：二人はよく和歌山県田辺市に同行していました。神島（かしま）の森の中心に周辺の山野を歩いて珍しい植生を観察し、採集していました。植物だけでなく蝶や蜻蛉などの昆虫類も里庄に持ち帰っていました。南方熊楠と面会したのはこの時期です。父の口ぶりから、昭和12年頃と思います。

④ 中断期（昭和18年～25年）：昭和21年10月6日の博物同好会第10回例会で、小太郎は五島先生のブタペスト論文の内容をかみ砕いてお話ししたと言っていました。昭和22年8月3日のカブトガニ観察会のことは何度も話していました。朝9時に笠岡駅に集合し、浜に出てカブトガニの生態について実地解説したそうです。

⑤ 第2期（昭和25年～54年）：小太郎は2回に1回ほど同行をしていました。徐々に同行の頻度は減り、私が知る頃はほとんど先生がお一人で出かけていました。田辺市周辺に限らず「今日は熊野古道を歩いた」「今日は伊勢神宮まで足を延ばした」と行く先も広範囲に広がり、その日観察した動植物のことを夜遅くまで話していました。

⑥ 昭和37年～47年、私が中学生～大学生の頃、春休みと夏休みには必ず佐藤先生が来訪されていました。休みが始まると高橋家の家族は「佐藤先生は何時来られるのか」と確認してそれぞれの予定を立てていました。

⑦ 我が家で二人が話すときは「寿美ちゃん、寿美ちゃん」とか「寿美江！」と私を呼びつけ、二人の話に同席させていました。先生の話が佳境に入ると、父は合いの手のように「よく聞いとけよ」「よく覚えてとけよ」と私に言い聞かせていました。生宗様が提供して下さった様々な一次資料の大半を当時目にした記憶があります。アメリカから届いた貝の標本、英文の書簡、妖怪事典なども拝見した覚えがあります。

⑧ 私が佐藤先生と最後にお会いしたのは、昭和54年3月10日の父の葬儀のときでした。小雨の降る中、我が家の庭に弔問客が並んでいる傍らで、佐藤先生はいつも持ち歩いていた黒い折りたたみ傘をさして、長い間じっと立っておられました。

⑨ 帝大進学は佐藤先生の希望でしたが、お母様が強硬に反対し、実現しませんでした。先生は勿論、金光中学で成績優秀でしたが、お父様は早逝され、お母様が生け花教師して生計を立てておられました。お母様は「惣領息子として佐藤家を守る義務がある。東京に行けば二度と里庄には戻らない。絶対に許しません」と言われ、「必ず戻ります」「いいえ、絶対に戻ってこない」と押し問答の末に、「東京がダメなら、京都帝大でもいい」と譲歩しました。

お母様は「東京も京都もダメです。里庄の家から通える場所にしない」と譲らず、金光中学の校長先生に面会し、佐藤家の事情を話して「受験のための内申書を絶対に書かないでください」と強くお願いしたそうです。親族や出身校の了解がないと受験はできません。こうした経緯で帝大受験はされていません。佐藤先生は「正直言うと、母親の

支配から逃れたい気持ちも少しはあった」と述懐されていました。

余談ですが、「家庭の事情で思う存分学問ができなかった」というのが先生と父の共通した悔恨で、たびたび話題にし、不運な境遇を競うように笑いながら話していました。

⑩ 佐藤先生がアメリカから送られてきた貝の標本を持って我が家に来られたとき「備前地方に生息するノアノハコブネ貝を送って欲しいと言ってきたが、ノアノハコブネ貝ことかどうか確信がない。備前地方にその種の貝は見つからないので、似たような貝を送った」と言っていました。

⑪ Schenck 博士の表記について、

米国地質学会の資料に **The family's pronunnciation of the name - Skenk, not Shenk —reveals this Dutch heritage.**とあります。オランダの先祖の家名が「スケンク」です。1650年に先祖が渡来し、Skenk⇒Shenk⇒Schenck とスペルが変化したと推測できます。日本には、日外アソシエーツなどのきちんとした資料でも、シェンク博士が一般的ですが、学術資料ではスケンク博士となっています。

⑫ これについては2つのエピソードがあります。まず佐藤先生が英文の手紙のやり取りをするとき、アメリカ人のシスター・メリー・コスカに助言を求めていました。シスターは「この人物は17世紀に渡米したオランダ移民の末裔なので、数世代前からアメリカ人です。それならシェンク博士とするのが良い」と主張され、佐藤先生は「日本ではその人物の出身国の読み方を使う慣習があるのでスケンク博士とするのが正しい」と主張されました。この論争は何度も繰り返され、どちらも譲りませんでした。

⑬ 1948年（昭和23年）12月13日、佐藤先生はGHQ本部に博士を訪ねました。その時「博士の名前はシェンクですか、スケンクですか」と尋ねました。博士はオランダの先祖の家名はスケンクですが、自分はスケンクと呼ばれたことはない。生まれた時からシェンクと呼ばれている。まあ、どちらでもいいことです」と答えたそうです。

⑭ 一次資料の中に佐藤先生自身が大学の「教授」と記されたものがあります。我が家で拝見した時、父が「教授になったのか」と尋ねると、「いや、なっとらん。教授しています。という意味だ」と言っていました。先生の遊び心でしょう。

（2021年7月12日 高橋寿美江 記）

2. 佐藤清明年譜について岡山大学での講師歴の情報—徳山氏より岡山大学の大学院教育研究科の清田哲男教授に問い合わせでの調査参考記録について

清田教授が人事課の岩田氏に在職履歴について確認された事項

* <佐藤清明>

職 名：岡山大学農学部 講師（現在で言う非常勤講師です。）

在職期間：昭和33年5月1日～昭和60年3月31日

元々非常勤講師の先生は、人事記録を作成しないこととなっているため、情報が少なく、昭和60年4月1日以降に雇用された記録は見つけることができませんでした。以上確認いただけると幸いです。

以前里庄町立図書館から岡山大学総務・企画部に問い合わせた時も不明との回答でした。したがって、現在のところ岡山大学講師歴は農学部以外は岡山文庫の年譜とおりとす。

IV 編集後記

『博物学者 佐藤清明の世界～附録 「現行全国妖怪辞典」』が「岡山文庫」シリーズ323 日本文教出版より発刊
知の巨人 「里庄のせいめいさん」の知られざる生涯が今明らかに！
(出版記念チラシより)

清明についてはじめての書籍が世に出たわけだが、出版に際して、総指揮官の木下氏より、活字本は永久に残るので、執筆活動は厳しいもので、執筆者の覚悟つまり、誤字脱字はもとより読者の立場を忘れないよう論文調を避け、読みやすさに意を用いる様にと説かれていた。清明の入門書という位置づけではあるが、清明の顕彰にとって重要な著作ができたことを、私は嬉しく誇らしく思う。

佐藤清明資料保存会のメンバーは少なくともカバン等にこの本を偲ばせ、折ある時、一寸調べる時等、何度も読み直してみると、絶えず新しいことを発見するであろう。

また、清明資料は、細かい部分までは研究が進んでおらず、まだ読み残しがあり、「岡山文庫」本を元ネタにして未知の領域を調べる中で、お宝を発見し清明研究を重ねていきたい。そして、「清明を読む会」や「清明研究会」での情報交換と分科会のテーマごとの掘り下げ、「展示会」「図書館ホームページの佐藤清明特設サイト」などあらゆる分野での内容の深堀を期待している。

会報の別冊に収録された清明資料「天然記念物調査録」の項目だけ見てもその内容は研究に値するに足りるものであり、翻刻が進み実地調査まで可能であれば岡山県はもとより多くの地域の方の参考になるものと考えられる。

「歩兵第十聯隊」と清明書簡の掘り起こし、まだ取り上げられてない人脈と情報の読み取りも進んでいる。

「淡水珊瑚」と昭和天皇の展覧実物にまつわる資料の発掘も進められ、こうした清明資料に関連する行事も期待される。

ところで、最近注目の清明に関連する情報を記す。

① 小学校5年生の国語教科書に「この本、読もう」の伝記ものの中に『自由のたびびと 南方熊楠』がある。清明の研究活動と関連する伝記で、熊楠の長女の南方文枝さんの情報に「自由な巨人」が描かれていて『佐藤清明の世界』に掲載されている資料の参考になる。

② NHKの朝ドラ、2023年前期の連続テレビ「日本の植物学の父、牧野富太郎」で主人公の富太郎をモデルにした物語の放映があるとの山陽新聞報道に関心がある。

③ 2022年2月3日山陽新聞記事に「“人魚ミイラ” 正体探れ、浅口・円珠院保存、倉敷芸科大科学分析開始（木下氏、江田氏立会）」が掲載された。清明が撮影した人魚のミイラ写真が元になり現在も発展している。同年9月の検査結果が期待される。また、同伴に関して笠岡放送とRSKのニュース放映もあった。

このような幅広い清明関連資料の情報が「佐藤清明」のハード本発行に繋がればありがたい

たい。

最後に『博物学者 佐藤清明の世界 附録 「現行全国妖怪辞典」』を送本した後、清心女子高等学校の三宅聖子校長よりメッセージを頂いている。

「佐藤清明先生が我校に長い期間奉職、残された実績が生きて、現在の清心女子高等学校の科学分野で生命科学コースもあり、理系女子が育っている。日本学生科学賞、国際科学技術フェア一等で“理系女”として活躍が目覚ましい。」

また、刊行本に対しての多くの方よりメッセージを頂いていて、佐藤清明資料保存会にとって励みになる。なお、『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』初版発行の売れ行きが好調との情報もありがたく嬉しい！

当刊行本に掲載されているが
2019年（令和元年）12月
佐藤清明が愛した菊桜2本を
里庄町歴史民俗資料館前庭に
植樹した。
2022年4月には高雅な花を
つけ、皆さんに楽しんでもらえ
る。藤井風さんの横断幕が菊桜
の生育を励ましているようだ。



☆ 岡山文庫『博物学者 佐藤清明の世界～附録 「現行全国妖怪辞典」』拾遺

（草稿の中から）

『天然記念物調査録』との出会い

清明資料の収集を始めた私は、まず、最も長い間教鞭を取った清心女子高等学校に連絡を取った。「清明先生のことなら、この方を訪ねてみなさい。」と学校から紹介されたのが渡辺義行氏だった。

渡辺氏は、昭和四十二年（一九六七）から平成十六年（一九八七）まで二十年間清明と清心女子高等学校で同僚として勤務した。清明の文化財調査に同行し、清明を最もよく知る人物だった。

平成二十九年（二〇一七）五月二十三日、生宗氏と私は、渡辺邸を訪問した。渡辺邸に入るとまず目に入ったのが、文机の上に山と積まれた資料だった。『岡山県主要動植物地図』など、大きく色鮮やかな資料に混じって目に付いたのが古色蒼然とした薄い冊子だった。

『天然記念物調査録』と題された冊子は五十二巻あった（補遺二冊）。内容を確認してみると、丁寧で几帳面な字で書かれたガリ版刷りの冊子で、一目で貴重な資料と思われる百四十タイトルの清明資料。それらを渡辺氏は三十年以上も大事に保存していた。

渡辺氏は、資料の寄託先を探されていたらしいが、決まらなかった。そんな時に、突然ちん入してきた私達が、貴重な資料を託されることになった。

（小野礼子）

書誌紹介

『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』紹介

顧問 木下 浩

令和3年10月26日、日本文教出版から岡山文庫323号として『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』が刊行された。

岡山文庫は、岡山の自然や文化について紹介する文庫のシリーズで、第1号は昭和39年の『岡山の植物』、一つの県でそれぞれのテーマについて書かれているものとして高く評価されている。初期には『岡山の焼物』や『岡山の伝説』など一つのテーマについて書かれたものが多かったが、近年は元岡山県知事の『三木行治の世界』や作家の『柴田錬三郎の世界』など人物にスポットを当てた号も見られる。

それらの岡山文庫のラインナップに今回、佐藤清明資料保存会がまとめた佐藤清明の生涯を記した書が加えられることとなった。その書の内容について紹介したい。

目次は以下の通りである。

- 第1章 生い立ち
- 第2章 方言・民俗学との出会い
 - 1 柳田国男と清明
 - 2 南方熊楠との交流
 - 3 戦前・戦中の清明
- 第3章 植物学・博物学の道へ
 - 1 清明と博物学
 - 2 牧野富太郎との出会いと交流
 - 3 シェンク教授と清明
 - 4 清明と同好会活動
- 第4章 天然記念物・文化財の保存
 - 1 『天然記念物調査録』
 - 2 国宝重要美術品史蹟天然記念物調査委員会
 - 3 藍坪

- 4 調査活動とその成果
- 5 清明が愛した「菊桜」
- 第5章 教育者としての清明・幅広い交流
 - 1 教育者としての清明
 - 2 地方の植物研究者たちとの交流
- 第6章 晩年の清明
 - 1 清明と皇室との関わり
 - 2 湯の池とオニバス
 - 3 地域住民との交流
 - 4 日常生活

附録『現行全国妖怪辞典』解説と翻刻

章立ては、佐藤清明（以下、清明と記す）の研究対象や仕事ごとに立てられている。

第1章では清明が生まれてから岡山の清心高等女学校に勤務し、研究者としてのスタートを切る前までが記されている。母との関係や学生時代の文芸との関わり、そして進学と就職について述べられているが、特に小倉中学校の教師を辞めて療養生活を送る経緯は清明に人生にも大きく影響を及ぼす場面であり、理解しやすい文章で記載されている。

第2章は清明の研究のスタートである方言や民俗学とのかかわりについて、1節では柳田国男との関係、2節では南方熊楠との関係がそれぞれ述べられている。柳田との師弟関係から方言集が清明の手によって次々と作成されていくが、南方との出会いにより、やがて方言の収集から植物学へと研究がシフトしていく。さらに災害と戦争が清明の研究や生活に影響を与えていったことが分かる。

第3章は博物学者としての清明の誕生

が記されている。植物学者牧野富太郎との深い交流により植物学・博物学へと道が開いたことが述べられ、スタンフォード大学のシェンク教授との交流の記述が清明の博物学者としての姿を浮かび上がらせている。特に清明の研究者としての方向性についての言及は貴重な指摘であろう。さらには清明が関わった研究会についても記載されている。

第4章は、清明が残した仕事として実は非常におおきなもの、天然記念物や文化財の保存という分野について述べられている。清明が岡山の天然記念物保存に大きな役割を果たしたことは、彼が残した資料を丁寧かつ詳細に分析し、具体例も交えながら述べられているこの章を読むことで容易に理解が可能であろう。また、清明が残した「菊桜」について記した5節はそのまま岡山の「菊桜」研究の文章ともなりえる内容となっている。

第5章は教育者としての清明にスポットを当てるとともに、清明の交流関係について述べられている。紙幅の関係で削らざるを得なかったが、岡山の植物研究者たちが清明とともにここに取り上げられることは、植物学史としても、当時の研究者ネットワークを知るうえでも非常に有意義なことである。

第6章は清明の晩年である。直接に清明の世話をされた執筆者と清明を一番よく知る執筆者が日常生活や地域・家族との交流などをエピソードを交えて記している。清明の人柄が暖かく伝わってくる。

ここまで各章を紹介してきたが、この書にはその他に2つの大きな特徴がある。その一つは、章とは別に清明について紹

介するトピックを設け、それぞれ別の執筆者が書いていることである。全部でトピックは8つ、全部を紹介することはできないが、清明が作詞した軍歌についてや清明流のメモ帳についてなど、どれも興味深い内容となっている。特に高橋小太郎との交流やカブトガニ、木之子島について記したトピックは短文ながら読み応えのある内容となっている。

もう一つの特徴は、巻末に附録として加えられている「現行全国妖怪辞典」の解説と翻刻である。現在のところ、清明の代表的著作と言える昭和10年の妖怪辞典を初めて翻刻し、他の方言集とのカード番号の比較について論じている。今では数多く出版されている妖怪事典の嚆矢としての清明版妖怪事典を初めて活字化したことは、日本の妖怪研究への幅広い利用が期待されるとともに、さらなる清明の研究への後押しともなると考える。

この書では、前書き・本文・トピック・あとがきなど合わせて22名の佐藤清明資料保存会のメンバーが執筆を担当した。これほど多くの執筆者がいる岡山文庫は、他にはないであろう。それだけたくさんの執筆者がいるということは、一方的な見方にとどまらず、多くの視点で清明について述べているということであり、佐藤清明という博物学者を理解する上でも大切なことであると考えられる。何より清明がやり遂げた仕事は膨大で、残された資料も数多く、まだまだ佐藤清明という博物学者の全貌を理解するには足りていないが、とりあえず現在の人びとと未来の研究者のための佐藤清明入門編は世に送り出したのではないかと

次ページの「佐藤清明人物相関図」にかかる参考事項

会報3号巻頭論考「佐藤清明と岡山の植物研究者」（2019.9.発行）で取り上げられた人物

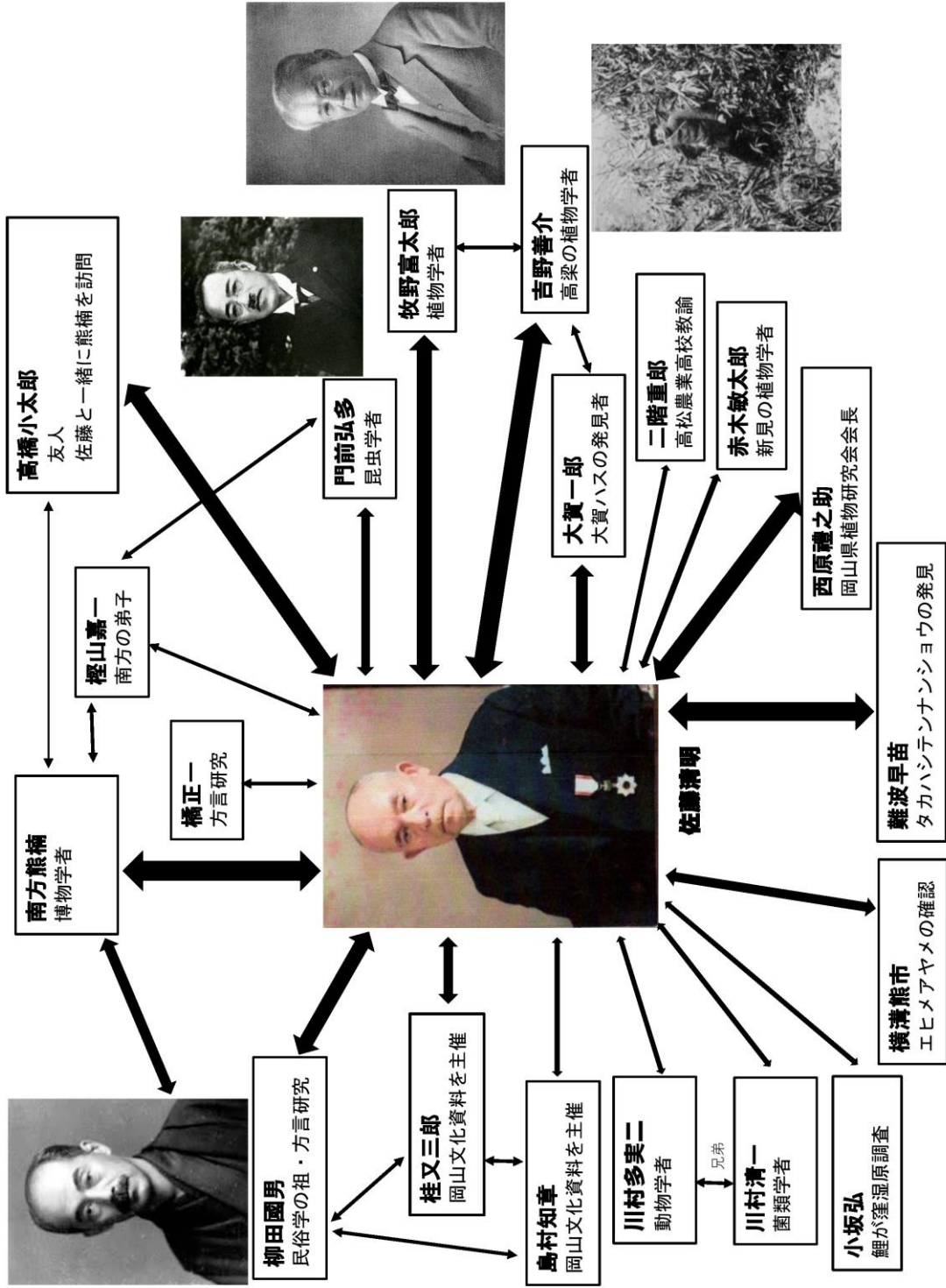
吉野善介・二階重楼・赤木敏太郎・小坂弘・難波早苗・横溝熊市・近藤近三・西原禮之助

第5回「里庄のせいめいさん展」（2021.8.実施）で取り上げられた人物

柳田国男・南方熊楠・新村出・桂又三郎・小坂弘・日野巖・本田實・赤木敏太郎・嶋村知章

時実黙水・高橋小太郎・宗田克巳・三宅一喜・横溝熊市

佐藤清明 人物相関図 (民俗学・植物学を中心に)



佐藤清明の交友関係のうち、民俗学(方言)と植物学を中心に掲載した。

民俗学の分野では、この分野のビッグネームの二人、柳田国男との出会いが端緒となって方言集の編纂を行い、やがて南方熊楠と交流を深めて博物学へとその研究をシフトしていく。

植物学では牧野富太郎というやはり日本の第一人者との交流が清明の植物学の基礎となるなど、清明の交友関係の幅広さは特筆に値する。

一方で、民俗学の分野では桂又三郎や島村知章、植物学では吉野善介や難波早苗など地元岡山の研究者とのつながりも見逃すことはできない。

清明の交友関係については、まだまだ解明されていないことも多く、研究の余地が残されているが、それらを解明することは地方の研究者がどのように研究のネットワークを構築していったか、ひいてはどのように中央と結びつきながら地方において研究を行っていたかを示す典型例となるであろう。

今後も他の分野を含め、この相関図を充実させていきたいと考える。

「佐藤清明資料」を読む ①

天然記念物調査録 英田編（ソノー）を読んで

顧問 稲田多佳子

1. はじめに

佐藤清明（以下清明）は昭和 23 年 7 月に岡山県重要国宝美術品史蹟名勝天然記念物調査委員に任命され、以後昭和 23 年 11 月から昭和 29 年 6 月までの約 5 年半に渡って岡山県内各所を調査した概要を「天然記念物調査録第一冊～第五十冊」として記録している。この調査録には、その当時の地名、交通事情や県の行政組織等も記載されており、それも貴重な記録となっている。

また清明の文章は歴史的、地理的背景等を簡潔かつ必要十分に説明している上、旅の途中で起きた出来事なども記され、旅行記としても大変興味深い。今回、「天然記念物調査録 第 18 冊 英田ソノー」を翻刻したので、その概要について記す。

2. 清明 英田郡訪問のきっかけ

英田郡は岡山県の北東部に有り、岡山駅から汽車で朝 9 時に出発して林野に着くのが 13 時と、日帰りでは中々難しいところであった。（なお、現在でも汽車で行くと同じくらいの時間を要するが、自動車であれば岡山から 1 時間 20 分ほどでたどり着ける。）

この調査は昭和 25 年 10 月 13 日～16 日の 4 日に渡って行われたとある。清明は昭和 23 年 11 月、英田郡のすぐ隣の勝田郡から第一回調査を開始している。しかし、調査は岡山県から委嘱されて実施しており、行きたいところに勝手に行くものではなく、会議等で計画されていたものと思われる。

前文には、英田郡を訪れるきっかけとして、『雅友 住吉巴氏本郡に着任し』とある。住吉氏が県英田地方事務所の課長に着任したことをきっかけに調査が実現したようだ。

住吉氏は、明治 44 年笠岡市西大島の出身で、岡山県職員として勤務の傍ら郷土史関係資料を独自に収集され、その貴重な資料は『住吉家文書』として笠岡市に寄贈されている。住吉氏は金光中学の出身で、清明と同窓の関係から、どこかで繋がりを持たれたものと思われる。この住吉氏の情報については、清明研究会の佐藤健治氏、生宗副会長を通じて教えて頂いた。

3. 安養寺

清明はまず英田地方事務所に到着し、英田郡事務所の住吉課長はじめ関係者と旅程を相談した後、林野にある安養寺の十一面観音の調査に向った。十一面観音は明治時代に既に重要美術品に指定されている有名な文化財である。清明はこれを見た後、住職の家族から「邯鄲夢の枕」も見せてもらう。その箇所を引用する。

『寺宝に「邯鄲夢の枕」という古枕がある。森侯夫妻の用いた枕で、実に三百年前の作である。南天材よりなり高さ約五寸、一は松竹梅の紋を漆で描き一は猫の模様を現して周囲一尺一寸ある。ガラスを挿入したる点、当時の珍品であったろう。昔、唐の廬生が邯鄲の宿でみたる夢の物語を思い出して面白い。』

先般、平泉で藤原三代の遺骸を研究されて当時の枕が現存しておるのと併せて日本風俗史上の貴重な標本であると信ずる。』



現存していれば 360 年以上前の枕であり文化財に指定されても不思議はないと思うのだが、現在その枕がどうなっているかは不明である。



図1 「邯鄲夢の枕」スケッチ

4. 尾原のケヤキ

翌朝、旅館を立った清明はバスで巨勢村（現在の美作市巨勢）に向う。清明と同行した人たちで測定したところ、目通り周囲 9.7m、根周り 10.7m、高さ約 30mあり、樹齢約千年と県内のケヤキとして当時一番の古樹だった。バス通りからよく見るとあるが、現在はそのような大木は見当たらず、（道も今と違うのかも知れないが）無くなっているようだ。

記録中、清明がケヤキについてわかりやすく説明しているので引用する。

『さて、ケヤキはアジア特産の落葉喬木で、巨大に成長して著しいからケヤキの名を生じたという。「けやけし」とは「著しい」との古語である。学名 *Zelkova* はコーカサス産の数種を世に出したゼルコウ氏に因むという。また槻（ツキ）という古名もあって昔は一般に用いられた。櫟の字は支那産サワグルミに充てられた漢字の誤用である。ケヤキは本州から四国、九州に及び、周知乍ら材が堅牢強固で伸縮、膨張小さく光沢本種の美なると耐久力甚だ強きを以て木材として□用さるる處である。』（□；不明）

5. 長福寺

尾原のケヤキ等をみた後、昼食を済ませた一行は英田郡の最も南、福本村に向う。このあたりからバスではなく県事務所の車で移動している。

長福寺の説明は清明の文を引用する。

『福本から東三キロ、川に沿うて地方事務所の自動車にて長福寺に向う。当寺の開山は天平宝字元年、孝謙天皇の勅願にて鑑真和尚（唐の揚州 江陽県の人。当時の高僧で彼地に於て門人四万人あった。日本の請により天平勝宝五年遣唐使藤原清河の帰る時に入朝、東大寺大仏殿の前に戒壇を設け、聖武上皇、光明皇后、孝謙天皇みな受戒。天平宝字元年勅により備前国壘田一百町を賜う山が開山し、弘安八年叡山の高僧円源上人が再興した。海拔四百メートル、福本、巨勢、河會、福山四カ村の境の真木山山上に伽藍を建立し、僧坊六十を具え、僧兵を擁して西国に於ける一大法力の源泉をなしていた。

然るに中世以降衰頽して、僧坊は漸次減少し、慶長頃は四十坊、享保に二十二坊、明治維新の時は僅に四坊となったが、この四坊また明治九年に失火によって失われ、焼け跡には庫裡を建てていたのが大正四年またまた焼失、そこで山麓に下りて昭和三年に現

在の長福寺を下に再建し、山上には昔ながらの三重塔のみが只一基高く天にそびえて古の繁栄の夢を物語っていた。長福寺三重塔は右表の如く岡山縣下の古塔婆中、最古のもので、棟札には弘安八年（一二八五）の文字があつて鎌倉中期の作。県下の国宝を通じての最古建築物である。七百年間山上に風雨をしのぎ腐朽その極みに達したので数多のいきさつの後に今や山麓にて再建の議決し、（以下略）』とある。

今の長福寺三重塔は昭和 26 年に現在の場所に移築・再建されたものである。



図 2 清明氏所有 長福寺スライド

6. 真木山のイヌツゲ

前述したように、もともと長福寺のあった所は真木山の山頂であり、そこにイヌツゲの巨樹が有るということで清明は調査を依頼されていた。靴を草履に履き替え、約十八町（1町＝約 100m で、約 2km）の坂道を上がっていくと山頂に着き、田畑や民家のある平坦なところに高さ約 5 間（約 9m）のイヌツゲがあった。

『坂道つきて平坦になり若干の人家をみつつ田や畑の耕作地があるところに出た。途端、忽ち右手にしだれかかったイヌツゲを望む。その下に泉井があり、水瀑に富む雑木を分けて見るに根元は二株あると思われたが、試みに鋤を借って根を掘り分けて調査すれば、根元は癒着して元来は一株である。更に深く掘り下げるに西北に更に今一枝が腐朽して地地下に株を残して枝のおもかげを伝えておる。且ては巨大なる一本のイヌツゲ、根本から三枝に分かれていたものが、一枝は枯れ、現在二枝が残り、その分岐点は地下に埋って一見して二株と見えたものであると判明した。根回り現在は六、二尺であるか、一枝の枯れない頃はおそらく一〇尺にも及んだものであろう。』

イヌツゲについて、清明の思うところが記されている。『且て、東京に明治神宮が御造営になった時、各府県から名産の樹木を献じたが岡山縣からは名産としてイヌツゲの献木をしたのであった。野生のイヌツゲが本縣を中心にして分布するのによるのである。その県内にその木の巨樹があるのは甚だ意義深く、恐らくイヌツゲとしては日本一であろう。』

今、清明のようにイヌツゲと聞いて明治神宮を思い出す人は少ないだろうが、明治神宮のイヌツゲは神宮の周囲に残っていて見ることが出来る。一方、真木山のイヌツゲはどうなっているのか不明である。

7. 後山登山

清明は当初の予定では 4 日目に後山に行く予定だったが、4 日目に悪天候が予想されたため、住吉課長の配慮で 3 日目に後山に行くことになった。一行は湯郷から林野まで徒歩で移動し、林野から大原行きバスに乗り大原町役場に向った。大原で東栗倉中学校長本位田隣太氏と合流し、住吉課長、辰野教育次長、清明の 4 人で後山に向った。

行者山の縁起について清明の文章を引用する。『行者山の縁起を尋ぬるに、一千二百年の昔、役ノ行者（六三四―七〇一 以後不明）の開基と伝え本尊延命地蔵は自作という。役ノ行者は大和国に生れ、生駒、熊野、葛城の諸山から始めて金峯 大峯 二上、高野、箕面の諸山を開き略士に至り遂に九州の英彦山まで極めたというからその途次に本山を開き、また那岐山をも開いたのであろう、山号延命山道仙寺、その後理源大師の再興、後醍醐天皇勅願にて法頭上人祈願を行った。天正の頃、尼子の兵火に焼け、また慶長十九年にも大火があつて現在の道仙寺堂宇は其後の建築である。（中略）吉野の大峯と当山とは種々の似た点があるため当郡の古名吉野郡、吉野川等の名が起つたと伝え、また一説では天長九年藤原吉野が美作守となつて赴任し善政を布いたのでその名を慕つて地名を生じたともいう。』



図3 後山のスケッチ

さて後山での記録を引用する。

『いよいよ後山にかかれば左に女人堂があり、これより女人禁制のおきてである。ここが海拔五〇〇メートル程で後山川の溪谷いよいよ深く路は曲折して、湿地にはミズタバコ、ヤマミズ、コチャルメルソウ、キツリフネ、ソバナ、アキチョウジ、クロバナヒキオコシ等が群をなし、岩角にはコバノミツバツツジ、カマツカ、ミヤマガマズミ、サワフタギ、コシアブラ、ウスノキ、アラカシ等が点在する。五合目あたりから原始林が始まり、頭上にはシャクナゲの群落があり、ミヤマシキミ、エンレイソウ、サイレン、ミヤマタニソバ、ジンジソウ、ミヤマネコノメ、ヤグルマソウ等が路の両側を埋め、ナナカマド、ドウダンツツジ、ナツツバキ、コバノウンボク、中国エノキ等が密生しておく。中に面白いことは、ヤマモミジ、オウイタヤメイゲツ、コハウチワカエデ、アサノハカエデ、ウリカエデ、ウリハダカエデ、イタヤカエデ、ヤマシバカエデ、ミツデカエデ、ミネカエデ、コミネカエデ等のカエデ属が十数種揃うて一箇所に分布することである。この一事を以てしても原始林としての価値を十分に保有しておく。』

後山は現在も女人禁制の場所が残っていると言うことで女性は行くことが出来ないが、清明の文章によれば当時の植生の豊かさが伝わってきて、一目見てみたい思いに駆られる。

清明一行は下山して他にも杉などを見ていたら夜になり、その晩は本位田校長の家に泊めてもらったとある。『元、東大教授 経済学博士 本位田祥男氏の宅はその表にあって矢張り一族に連つれる由。』と記載がある。

昭和14年吉川英治の小説「宮本武蔵」に、武蔵の友達として本位田又八という人物が描かれた。本位田祥男氏が東京帝国大学の学生に「又八」とあだ名されるようになり、本位田氏が新聞に苦情を投書し、吉川英治氏と論争になったというエピソードがある。清明も、夕食時にその話を聞いたのかも知れない。

なお、本位田校長と清明はその後も昭和40年代の植生図調査などで交流が続いていたようである。

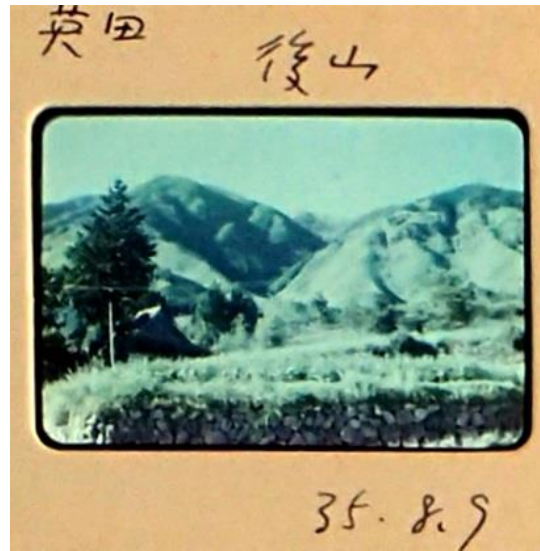


図4「後山」スライド

8. 宮本武蔵の家

翌日は予報通り小雨が降る天気、当初予定には無かったものの、近いと言うことで、一行は讚甘（さのも）村の宮本武蔵の生家を見に行くことになった。そこには、表側は熊本の細川旧熊本藩主細川護成侯伯爵の染筆により、宮本武蔵宅跡とある。裏には、漢学者であり大正天皇の御用掛を務めた三島中洲氏撰文が刻まれている。

清明はその裏側の文を調査録に収載した。現在、現地に行ってみても表側は見えても裏に何が書いてあるのか判然とせず、もはや読み取ることはできない。むしろ裏に何か書いてあるなど思いもしない状態である。

2021年11月に里庄町立図書館でこのことを話したところ、後日研究会会員の中川氏に「英田郡史」（1923年刊）に文章が掲載されていると教えて頂いた。この撰文は県民にももっと知られるべき貴重な文化財であろう。

清明の残した写真の中に、昭和33年の武蔵生家跡碑がある。きっかけは悪天候での予定変更で見た碑だが、清明は是非その姿を記録しようと改めて訪ねたのかもしれない。

また清明は武蔵が二刀流を思いつくきっかけと言われる讚甘神社、武蔵の父平田無二斎の実家である平田邸でケヤキやタラヨウなどの大木を見たと記載している。これらについては、現在も看板等で詳細を知ることができる。

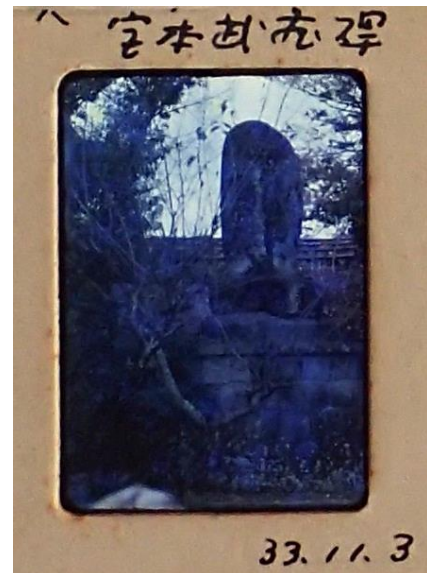


図5「宮本武蔵」碑

9. 大原

小雨の中、再び一行は大原町役場に向う。ここは昔の因幡街道の一駅で、鳥取と兵庫をつなぎ大名も通る場所であった。

『参勤交代の途次、大名が宿泊したのは本陣で、大原本陣の館は有元邸に現存しておる。当主、有元一陽氏（大原郵便局長）及び大原町の郷土史家難波剛一氏（元、大原町長）に案内せられ旧本陣跡をみる。有元氏は南朝の忠臣有元佐吉の嫡流でこの本陣を日華館

という。世て因幡中将松平相模守の常宿をつとめ、また古は後鳥羽院の御宿となり、伏見宮、小松宮の御用をつとめた。左の脇本陣は今、湧本邸になっておる。

有元家に於て保有されておる天保時代の世講録（年中行事日記）を拝見し時の移るを知らず、漸く上郡行きバスを得て、本位田校長に送られて帰る。』

その後の事は書かれていないが、帰路は上郡から山陽本線で直接里庄に帰ったと想像される。

清明は記録の最後にこの調査では見きれなかった名所を挙げている。

『大原で調査すべきものは次の諸件である。

- | | | |
|----|---------|--------------------|
| 一、 | 阿部の大木 | 大原町山王山城址にあるアベマキの巨木 |
| 二、 | 鎌坂一貫の清水 | 名泉 |
| 三、 | 井桁の額 | 山王山宮の神 文明十二年在銘 |
| 四、 | 不動明王 | 淡海筆 佛頂山円明寺蔵 |

なお讚甘村宮本武蔵宅跡、前述の世講録等また重要な文化財であると思う。共に他日の調査を期す。』

現在も鎌坂一貫の清水は名所として紹介されており、飲むことも可能である。坂を上った後にいただく自然の水は誠に美味しく、かつて大名や宮本武蔵もこの道を通り、この水を味わったのだと思うと感慨深い気持ちになる。

調査録や、写真の日付から見ると、清明は何回も英田郡に足を運んでいる。日付との関係から、清明の調査を経た後文化財に指定されたものも多いと思われる。美作市や西粟倉村には現在もそれらの自然や貴重な文化財、寺社等が数多く残されている。

皆さんも天然記念物調査録を参考に、文化財を探したり、清明の旅程をたどってみてはいかがでしょうか。近くで清明がガイドしてくれるような気分で、旅の楽しみがより一層増えることは間違いない。

天然記念物調査録 第18冊 英田編(ソノー)の要目一覧

郡名	No	日程	内容	所在名	備考	調査同行者等
第18冊 英田の1	147	昭和 25.10.13. ~16.	一 尾原のケヤキ	巨勢村		英田地方事務所職員
	148		二 真木山のイヌツゲ	福本村	本輯所載	課長 住吉 巴氏
	149		三 後山原始林	東粟倉村	本輯所載	辰野徳夫氏
	150		四 宮本のタラヨウ	讚甘村	本輯所載	庶務課長 前田好光氏
	151		五 大原のアベマキ	大原町	本輯所載	主事 岩本貞一
	152		六 大山椒魚生息地	西粟倉村	未調査次輯続載	林野高校 道広正尊教諭
	153		七 佛法僧生息地	東粟倉村	未調査次輯続載	
	154		英田郡		未調査次輯続載	
	155		林野町にて			
	156		安養寺の十一面観音		本尊特別開扉	林野町役場 安藤昇平氏
	157		福本村へ			安養寺住職 橋本旭彰師
158	長福寺					
159	長福寺の国宝					
160	後山登山					
161	大原の本陣					

岡山文庫「博物学者 佐藤清明の世界」出版記念コーナー（2021.11.1～12.26. 里庄町立図書館）



岡山の百科事典「岡山文庫」に仲間入り（323冊目）

佐藤清明についてのはじめての書籍！

博物学者 佐藤清明の世界 出版！

附録「現行全国妖怪辞典」

「岡山文庫」シリーズ 323 日本文教出版

浅口郡里庄町出身の博物学者 佐藤清明（1905～1998）とは？

戦後の岡山の自然を調査し「天然記念物」として守りぬいた博物学者
 一万点の植物標本を採集した植物学者
 柳田国男、牧野富太郎、南方熊楠などの学者達との交流 など

佐藤清明資料保存会 編
 <内容>
 第一章 生い立ち
 第二章 方言・民俗学との出会い
 第三章 植物学・博物学への道へ
 第四章 天然記念物・文化財の保存
 第五章 教育者としての清明・幅広い交流
 第六章 晩年の清明

『現行全国妖怪辞典』佐藤清明著（1935年）里庄町所蔵
 柳田国男にさきがけ、全国各地に残る妖怪の名称を集めて妖怪事典として発表した。
 「妖怪大戦争」「ゲゲゲの鬼太郎」で今大人気の妖怪「スネコスリ」を初めて紹介したとして知られる。

佐藤清明資料保存会（里庄町立図書館内）
 岡山県浅口郡里庄町大字里見 2621
 TEL：0865(64)6016
 e-mail：slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp

【注文は】日本文教出版株式会社
 岡山市北区伊島町1丁目4-23
 電話岡山 (086)252-3175(代表)
 http://www.n-bun.com/ まで

※全国の書店でも取り扱っています。

(デザイン・徳山容)

岡山文庫は、日本文教出版社(岡山市)が、岡山県の百科全書を目指して昭和三十九年に会員頒布制で創刊し、以来半世紀にわたって刊行が続けられている。

第一冊目は、清明と繋がりのある西原礼之助の「岡山の植物」で、最新刊の「博物学者佐藤清明の世界」は、シリーズの三百二十三冊目となる。

岡山文庫の著者には、佐藤清明の後を追いつ、第六高等学校理科教室助手を務め、旧制中学校勤務を経て高等学校の教諭となり、後に岡山大学の講師として教員養成に関わり、清明から畏友と敬称された宗田克巳の八冊をはじめ、桂又三郎・古谷野寛、そして当会顧問土岐隆信、木下浩の両氏らが名を連ねる。

里庄のせいめいさん展

2021.8.1~26. 里庄町立図書館

天然記念物調査活動の足跡をたどる ↓

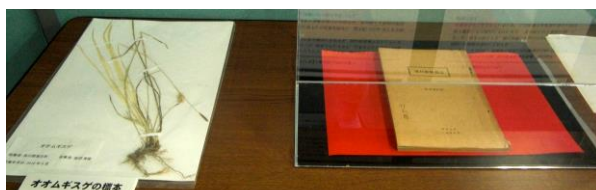


女子短大の学生とともに(生花展・万葉園)

清明さんと教育～岡山県生石高等女学校・岡山女子短期大学



佐藤清明の植物研究の足跡を今に見る ↓



オオムギスゲの標本 (2021)と浅口郡植物誌 (1932)



清明と交友のあった人びと

今回の展示では、柳田国男・南方熊楠・新村出・桂又三郎・小坂弘・日野巖・本田實・赤木敏太郎・嶋村知章・時実黙水・高橋小太郎・宗田克巳・三宅一喜・横溝熊市の諸氏を紹介。

清明と学校教育

佐藤清明は、結核療養後の昭和3年(1928)に、岡山県私立生石高等女学校(現 おかやま山陽高等学校)と生石教員養成所の教諭として採用された。(23歳)

昭和5年(1930)春、清明より5歳若い、校長の子息で歌人の原田進(1910~39年)か、国語教師として着任し、短歌中心の情操教育を始めた。着任5年後、かねて計画の「万葉植物園」を女学校内に造築し、自ら大島村(現 笠岡市)の御嶽山などを歩き、万葉植物を採取し、二百余種を植える。万葉集に収録される草木を詠み学ぶための施設だった。

しかし不運にも、昭和14年(1939)1月出征先の中国漢口で戦病死(29歳)し、万葉植物園の行く末は、清明を含む女学校関係者に委ねられることになった。

清明は、岡山女子短期大学が設立された昭和26年(1951)から43年(1968)まで、清心女子高等学校教諭の傍ら講師を務め、写真のように生物学の授業をととして万葉植物園にかかわり、後に岡山大学(農学・医学・薬学)に植物学担当講師として勤務している。



佐藤清明ゆかりの菊桜 育成記録

2022. 2. 24 佐藤健治

佐藤清明^{きよあき}（以下、清明と記す）ゆかりの菊桜は、岡山県下各所に植樹され、生育している。今回は紙面の都合で下の3ヶ所にしぼって、その育成経過についてまとめてみました。

なお、これら3ヶ所及び清明生家(里庄町)の菊桜を植樹や養生するにあたり、助言並びに作業等については樹木医・國忠征美氏に依頼している。

1. 里庄歴史民俗資料館前庭の菊桜（2本） 植樹時期：2019(令和元)年12月3日

- ・ 2019(令和元)年5月17日、國忠氏の立会で菊桜2本の植付け場所を選定する。
- ・ 2019(令和元)年8月5日、國忠氏所有の菊桜育苗園(久米南町)を視察し、順調に生育中の苗木(12本)を確認する。(生宗脩一・高橋達雄・佐藤健治)
- ・ 2019(令和元)年11月28日、佐藤清明資料保存会(以下、本会と記す)の会員有志により、植樹地2カ所の植付け準備作業等を行う。具体的には、2トン車で2回投入された真砂土の整備等を行う。

① 2019(令和元)年12月3日

里庄町職員・高岡神社(里庄町)役員・近隣住民及び本会員有志等の立会いのもと、加藤泰久町長や杉本秀樹教育長他多数の方々の手により、國忠氏育苗の菊桜2本を植樹する(写真参照)。

- ・ 植樹以降、随時、本会員有志により、2本の菊桜の水遣り及び周辺の草取り等を行う。

② 2020(令和2)年1月15日

本会員有志により、2本の菊桜周辺の防草シート張り等を行う。

③ 2020(令和2)年2月9日

國忠氏が2本の菊桜の生育状況を観察し、施肥(化成肥料)及び剪定作業を行う。

④ 2020(令和2)年12月3日

本会員有志により、2本の菊桜の、施肥及び周辺の草取り作業等を行う。

⑤ 2021(令和3)年5月1日

本会員有志により、2本の菊桜周辺の、防草シートの張り直し及び草取り等を行う。

- ・ 2021(令和3)年8月9日、2本の内の1本(北側)の菊桜が、台風(9号)による強風の影響を受ける。

⑥ 2021(令和3)年11月16日

本会員有志により、2本の菊桜の、支柱強化及び周辺の草取り作業等を行う。

植樹風景 (2019. 12. 3)



菊桜の開花状況



(2021. 4. 15 撮影)

⑦ 2021(令和3)年12月28日

本会員有志により、2本の菊桜の、施肥(化学肥料)及び周辺の草取り等を行う。

2. 岡山大学構内の菊桜(1本)

・ 植樹時期：1979(昭和54)年3月17日(出处：大学構内の看板文)

岡山大学構内(現、本部棟東側)にある菊桜は、清明が植樹したと伝えられている。この菊桜は、終戦直前の1944(昭和19)年、清明が旧制第六高等学校武道館横にあった別名「六校菊桜」の一枝を、戦災を予測して里庄の自宅に持ち帰って継承していたため、かろうじて種をつないだと説明されている。

この由緒ある菊桜も、本会結成以前は放置されたかのような状態で、樹齢のわりに、成長の跡や樹の勢が感じられなかった(写真参照)。そこで次の養生をした。

養生以前の状況



① 2018(平成30)年7月9日 立会：生宗脩一・稲田多佳子・佐藤健治

國忠氏により菊桜の樹勢回復作業を本格的に実施。具体的には、a土壤改良(竹炭粉や化成肥料の投入)、b特殊機械を使った根回りへの空気注入、c幹の加熱殺菌、d剪定及びe根回り周辺への防草シート張り等を行う(写真参照)。

a土壤改良



b空気注入



c幹の殺菌



d剪定



e防草シート張り



② 2019(令和元)年12月3日 立会：生宗脩一・土岐隆信・稲田多佳子・佐藤健治

國忠氏により菊桜の樹勢回復作業を実施。具体的には、枝木剪定、施肥(化成肥料)及び周辺の草取り等を行う。

③ 2020(令和2)年1月31日 立会：生宗脩一・佐藤健治

國忠氏により菊桜の樹勢回復作業を実施。具体的には、傷んだ幹の、加熱殺菌・特殊薬剤の塗布・ビニールカバー及び麻布巻等を行う。

④ 2021(令和3)年1月10日

本会員有志により菊桜への施肥(化成肥料)及び周辺草取り等を行う。

⑤ 2021(令和3)年12月25日 立会：生宗・西崎・佐藤

國忠氏により菊桜の樹勢回復作業を実施。具体的には、菊桜への施肥(化成肥料)、周辺の草取り及び枝木剪定等を行う(写真参照)。

岡大の樹勢回復作業



(2021. 12. 25 撮影)

3. 高岡神社境内の菊桜（1本）

高岡神社境内にある菊桜は、昭和から平成へと改元があった際、それを祝して清明が手植えをしたものだと伝えられている。その当時は小さかった周辺の雑木が、令和に改元される頃には、菊桜をはるかに越えるほど成長していた。

・ 2019(平成31)年4月頃、菊桜の樹勢が弱っているのを神社役員が確認する。

① 2019(令和元)年5月17日、國忠氏の助言をもとに神社役員が、いまある日陰地から日当たりの良い所への移植を決める。後日、周辺の雑木を伐採する。

② 2020(令和2)年2月9日 立会：原田勝氏・本会員有志
國忠氏の指揮のもと、神社役員有志がひ弱な菊桜を事前計画通りに現在地へ機械(ユンボ)等を使って移植す(写真参照)。その際、「木のガン」1ヶを切除する。また、土壌改良(真砂土・竹炭粉・化成肥料等の投入)を行う。

③ 2020(令和2)年9月25日 立会：生実総代長・生宗・佐藤
國忠氏に生育状況を確認してもらおうと、「葉が少ないが枯れてはいないようだ。水はけの悪い土壌(赤土)をもっと改良する必要がある」との助言を受ける。

④ 2022(令和4)年1月10日
本会員有志により、高岡神社役員(生実総代長他)立会いのもと、土壌改良を目的に施肥及び割った竹束の打ち込み作業等を行う。右の写真はその時の記念写真。(了)

移植作業



(2020.2.9 撮影)



<編集後記>

2020年に始まった新型コロナウイルス COVID-19 の蔓延は勢いが止まらず3年目に入りました。蔓延防止策の一環として公共施設の閉館が繰り返される中、その合間を縫って郷土岡山のエンサイクロペディアである「岡山文庫」の一冊として「博物学者佐藤清明の世界」が上梓されたことはこの上ない喜びとなりました。また、岡山大学本部構内、岡山県立青少年農林文化センター三徳園、里庄町中央公園(歴史民俗資料館前)、佐藤家ゆかりの産土神・高岡神社境内などにおける「菊桜保存育成活動」が、会の活動のもう一つの柱として始まっています。

会報8号では、こうした一連の活動を牽引して下さっている方々にまとめをお願いいたしました。併せて「清明を読む会」でのご発表の中から、「天然記念物調査録 英田編(ソノ一)を読んで」の書下ろしをお願いしています。これらを、岡山文庫と関連付けてご覧いただけると幸いに存じます。

(理事・会報担当 佐藤泰徳)

佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No.8

発行日 令和4年3月20日
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 高田正信
住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.slnet.town.satosho.okayama.jp>
Eメール : slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp